

“寂しい” 右翼が迷彩服を脱いだとき

熊谷 博子

月刊現代 1990年5月号 掲載

組合幹部、新聞社勤務、自民党員などと前職はさまざま。いまだテロを肯定する体質も残しながら、新左翼との接点を探る新しい動きもでてきた。変貌する12万人はどこへ行くのか

長崎一過激な集団の行動原理

正気塾の本部で、私はたった一人、皆が帰って来るのを待っていた。にぎやかな長崎の市内からはずれた、三川町の川べり。突然、東京から客を連れて帰ってくる塾長を迎えに全員留守だ。

建物はまるで建設現場に立つような塀に囲まれているが、外の様子はビデオ・カメラでよく分かる。道の向かい側の駐車場には、東京でもちょっと見られない、ゴツい大きな黒塗り街宣車が3台。

玄関脇の事務所の正面には、右翼団体ならどこにでもある、大きな日の丸と昭和天皇の肖像写真。長崎水害の際、救助に尽力したとして本島等長崎市長からの感謝状もある。日の丸の下に若島征四郎塾長（47歳）の筆で額。

吾も人 浮世に未練残れども 止むに止まれぬ 正気塾魂 一人一殺

横の壁には、メンバーの名を黒字で書いた木の札が並ぶ。現在約30人ということだ。うち、本島市長を撃った田尻和美容疑者など3人が、赤字の札にひっくり返っていた。

さらにその脇に、全国のやくざ組織から、自分の組の構成員の××を破門したという文書が、何十枚もズラリとはってある。除名通知状のひとかたまりもある。除名は右翼で、破門はやくざ社会で使うのだと、昨日訪ねたときに教わった。

玄関奥に、若い塾生達が寝泊まりする広い畳の部屋。入り口には三島由紀夫氏の写真。正面には大きな神棚。亡くなった塾長の両親やその他の関係者の写真も見える。事務所にあるよりさらに大きな日の丸と旭日旗。

脇の壁には、田尻容疑者への面会の記録表。そして事件後唯一、直接正気塾を訪ねて中に入り、抗議をした勇気ある人からの抗議文が、律儀にはられていた。

部屋の真ん中にポツンと、子供の赤い自動車が置きっぱなしになっていた。下からは川のせせらぎが気持ちよく聞こえるし、右翼の本部とは、およそ不釣り合いな光景だ。ウーン、この部屋に子供の自動車か。

そのうち、自動車の持ち主が、トコトコとやってきた。2歳になる人なつっこい男の子だ。事務所の2階で、一家で暮らしている副長の子供だ。おいしそうに食べているトーストを半分、私に「ハイ」とくれる。若島氏を待つ間、ただひたすら、この子と遊んでいた。

近くの塾長宅には、韓国の民族派のリーダーといわれる、韓国相撲協会副会長らがいた。盧泰愚大統領の訪日に際し、韓国側からの天皇の「謝罪」要求にいきりたった日本の右翼十数団体と、来日前ひそかに東京で会合を持った。今回行動を控えてくれたら、天皇訪韓の際には命をかけて守るからと、反日感情を説明しながら、日本右翼を説得した。日本右翼と反共・民族派を標榜する韓国右翼との、いわば手打ち式だ。その仲介をしたのが若島塾長だという。

正気塾の一日は、朝8時半、行動隊長（42歳）が若い者を起こすところから始まる。手と顔

を洗い、神棚を拝む。部屋の中からまず皇居遥拝、外に出て整列、さらに丁寧に皇居遥拝。9時、君が代のテープが流れる中で、日の丸を上げる。

私が訪れたときは、全員東京に出ていたものだから、行動隊長が一人でやるのを見ることになった。

「右翼ならば、これぐらいきちんとやらんば」と言う。

正気塾で最初に会ったのが、この行動隊長。次に会ったのが国際局長の肩書きを持つ在日韓国人であった。以前から、在日韓国人右翼の存在を聞いてはいた。しかし、それにしてもなぜ在日韓国人が、日本の右翼組織に入るのか。

彼の両親の故郷は済州島だ。今、35歳。3人の子供の父親だ。大阪の猪飼野のど真ん中で育ち、小学校から高校まで、民族学校へ行った。妻も韓国人だから、家族に日本人はまったくいない。

両親は、まず子供たちに自分の国のことを知らせなくてはと、イデオロギーには関係なく、数が多かったという理由から朝鮮総連系の学校に入れた。言葉や文化のほうが先だった。

しかし、中学1年の2学期から、突然、金日成思想の学習が強くなる。日本の教科書も使っていたのだが、朝から夕方まで、キム・イルソン、キム・イルソンと同じ内容の繰り返しとなった。

赤い札が5枚に増えた

「その頃から、共産主義とか社会主義に反発するのではなくて、アレルギーですね。まっすぐなもの右になりますよ（笑）」

15年前から若島塾長のことは知っていた。正気塾が韓国と関係ができ、自分の国との友好親善に役立てばと、手伝い始めた。

「どこの国でも一緒ですよ。自分の国の国旗を否定してですよ、国歌を否定するような人間は、嫌だったら外国へ行けばいいんですよ」

—皇居遥拝もやるんですか？

「ちょっと自分の場合、複雑なことがあるので、相談してやめにしてもらってます。君が代のときは、胸に手をおいていますよ」

—右翼というと天皇なんだけど？

「割り切らなしょうがないでしょ。本音で言うたら結論は簡単ですよ。興味もないし、敵意も持たんということですよ」

彼の今の悩みは、子供たちに韓国の言葉や文化を教えたいのに、日本の学校に入れていることだ。自分のような教育を受けさせたくない。

正気塾には、香港からの若い塾生も二人いて、寝泊まりしている。

正気塾の名は本島長崎市長の狙撃事件後、一躍日本中に知れわたった。先日も、熊本で捕まった元右翼幹部が、俺はあの正気塾を知っていると恐喝をしていた。それまでも過激な行動は多い。84年には、幹部2人が長崎地裁大村支部の判事を短銃で脅し拉致、監禁をしている。今年も、都バスに対する恐喝未遂で2人逮捕されている。

田尻容疑者の3回目の公判の前日、再び正気塾を訪れると、赤い札が5枚に増えていた。副長の福田雅光容疑者（35歳）ら2人が、東京で「京セラ」を恐喝していたためだ。私が遊んだ無邪気な男の子も、母親と一緒に、父が拘置されている東京へ行ってしまった。

また上がり込み、正気塾の皆が食べるのと同じ食事、味噌汁に煮物に焼き魚を食べて、待つ。若島塾長が帰って来たのが、夜中の12時半だった。それから3時半まで、私の質問に付き合っ

てくれた。

「社会は僕に烙印を押しとる」

満州からの引き揚げ者で、朝鮮人や中国人に囲まれて育った。様々な職業を経験し、81年38歳の時に、正気塾を作った。中国の文天祥の作で、それを藤田東湖が、神州、天皇などの言葉を入れ、日本風にした「正気の詩（うた）」から名前をとった。

—右翼って何なんでしょうね。

「今の時代に、最も日本人らしい日本人なんじゃないですか」

—なぜ、右翼に？

「育ちもいいわけじゃないし、学歴もないし、前科もありますし、何か悪いことをしたら、マルボウ、暴力団。もうこれは、事業家になれんとやな。社会は僕に烙印を押しとるんやな、と。任侠道というのは、私は好きなんです。義の精神が。ただ、ヤクザというのはどうも納得がいかなくて、その当時、右翼団体がありましたからね、右翼をしようと」

—天皇とは？

「天皇は自然体、と思っている。日本の国土に、山や樹木のように自然体やから、語る必要もなかしね。その上にわれわれは生まれとるんですからね。天皇がいなかったら、日本はないじゃないかと」

大きなメガネの奥の、普段はタレ目気味の優しい目が光った。

「私はこれから、田尻が何年行くか、それだけが心配なんです。私は刑務所に行ったのは、たった5ヶ月です。でも死ぬほど辛かったですからね。そういう覚悟でやった本人に対して、とやかく言うてもらったら困る。誰が何と言おうと、田尻は死ぬまで俺が擁護すると、それはどんな極悪人でも（自分が守るのは）当然じゃないですか」

—今回も恐喝で捕まって、正気塾は単なる恐喝集団なんじゃないかと、言われているんじゃないですか？

「そうでしょうね。恐喝とか何とか言うても、正気塾とか、思想集団とか、例えばヤクザとか言われている人たちがね、どこからでもメシは食わせてもらっていないですからね。資本主義社会の中で、カスミ食っていけないわけですからね。しかし、思想信条の自由ですからね、政治結社であってもいいわけでしょ」

話している場所は、皆が食事をする、台所のある部屋だ。

「『正気の詩』もよく勉強して、社会に対して恥ずかしいことをするなど、皆に言います。しかし、うちの福田なんかも、私は17歳の時から知っているんですよ。だから副長にしています。彼はね、字も読みきらん、書ききらなかったんですよ。無学文盲の男だったんですよ。今は、字も読めるし、本も読めるし、字も書けますよ。努力してね。副長だから焦りもあるし、資金のこともありますよ。いい男ですよ。でも世の中には、そんな話はわからない」

信じた人についてゆく

ところで、男社会の正気塾だが、意外に、正気塾を支えているのは女たちだった。

外で見ているとともかくコワモテだが、中にはいると、意外に家庭的な雰囲気がある。

塾長夫人の富子さん（42歳）は、目鼻立ちのはっきりした、あっけらかんとした明るい感じの人だ。

「最初はばあちゃん（亡くなった若島氏の母）と二人で、やめてと言ってたんですよ。『何でこんなことせんばいかんかね』って。でも、惚れて別れんきらなかったら、ついていくしかないでしょ」

彼女がずっと、多いときは30人近い塾生の食事を作ってきた。朝、台所でたくさんの目玉焼きを作っていると、君が代が聞こえ、日の丸が上がる。体がしゃんとして、そんな時思うのだそう。

「私もすっかり、右翼の女房になったんだな」

ただ、あくまでも裏方に徹し、女たちはよほどの用事がない限り、事務所には入るなど言われている。

六本木に、正気塾の東京事務所がある。ある日訪ねたら、女たちと、所狭しと駆け回る子供たちの声であふれていた。東京で捕まった夫のため、事務所のため、子供を連れ、生活の場を長崎から東京へ移した妻たちだ。婚約者もいる。私が以前会った男の子もいた。彼女たちは口々に言う。

「一緒になったとき覚悟しとかなきゃいけなかったんでしょうけど、突然だったから……。やっぱり、家庭は犠牲にしないでほしい」

「右翼運動のことは、納得したうえで結婚したことです。私は考え自体は間違っていないと思っていますね。本人についてだけです」

「私、右翼って何か、知らなかったんです。最初、本人がそういうことをしてるっていうのも。正気塾って何かも全分からなくてはいって。今もあんまりよく分かりません」

—正気塾って、世の中から、すごく怖いと思われていると思うけど？

「怖くないですよ。おもしろいんじゃないですか。普通のサラリーマンの奥さんより、毎日変化があって。辛いこともありますけど」

—こんなことになっても？

「(夫が拘置所の中)にいても、心配してくれることが伝わってくるから。しみじみと、ああ、待つとかなないとけないと思うし。困ったときに頼りにならないといけないんじゃないですか、女って」

まだ2、3歳の子供たちが、ますます元気にソファで跳ね回る。取調べ中でまだ夫に会えない妻が、ポツリと言った。

「早く、お父さんに会いたい」

広島一平和運動を尊王主義で

警察発表によれば、今、日本の右翼団体は、約980団体、12万人余り。10年前は600団体、7年前の調査では840団体だった。その間、人数は変わっていない。うち、活発に活動しているのが、約2万3000人、戦前からの流れを引くのが3000人、という。

私が今回、右翼と呼ばれる人々と付き合ってみようと思ったのは、いくつかのきっかけがある。

普段、右翼とはまったく接点がない。よくわからない。それどころか、見えない恐怖感がある。黒塗りの街宣車に大きな日の丸、大きなヴォリュームで軍歌をかけ、行動服の威圧的な姿で、北方領土、憲法改正、反共、日教組粉碎を叫び、どこの団体もあまり個性がない。何かあれば、すぐ街宣車で押しかける。基本的にこういう方々とは、おつき合いしたくない。天皇制のことに触れると、いつやられるかわからない。

私は半年前、11歳年下のパートナーと結婚した。ところが、その彼から、学生時代、右翼の

街宣車を、“乗っ取っちゃった”という話を聞いた。

場所は広島だ。アメリカの学生たちを案内していた。反核のビラもまいていた。

そのとき、背後から、「みなさん、この学生たちもアカです」と大きなスピーカーからガナリたてる声が聞こえてきた。街宣車こそ白だったが、日の丸を掲げ、行動服に編み上げ靴の右翼がいた。「おかしなことを言ってるな、ウルセエナ。俺にもしゃべらせてくれ」と、彼は街宣車の上に乗って、マイクを握った。また、彼の友人が野次をとばしていたら、「青年よ話そう」と白い街宣車の上に上げられ、討論もしている。フーン、右翼とそんな接点があったのか。

そういう右翼もいるのだなと、興味を持った。会いに行くことにした。

大日本愛国党広島本部長の島村成就氏（50歳）だ。昨年7月末、平和公園から「全損保労働組合被爆三十周年記念之碑」を持ち去り、“平和公園監視団”の名で犯行声明を送りつけ、非難を浴びた。碑は、2 km 離れた空き地に放置されていた。300 kg もの重さのみかげ石だ。

会って驚いた。エッ、この人がそんな事件を起こす右翼、という感じの、きゃしゃで温厚な人だ。その日、初対面で10時間しゃべることとなった。

「全損保の碑」は、原爆資料館近くにひっそりとある。 碑文はこうだ。

「なぜ あの日は あった なぜ いまもつづく 忘れまい あのにくしみを この誓いを」

島村氏は、まず「にくしみ」の表現が「ヒロシマの心」の中心である平和公園には、あってはならない。市の平和行政の路線にも反する。そして、「なぜ あの日は あった」の「なぜ」は資本主義の政治体制をさす。さらに、「なぜ いまもつづく」の「なぜ」は天皇制をさす、と言う。

つまり、憎しみを語り、資本主義に反対し、天皇制を否定する碑を、平和公園から動かした、ということになる。

標的はその時の政治体制

さらにびっくりしたのは、彼が、平和公園の一つ一つの碑の成り立ち、また原爆慰霊碑の碑文「安らかに眠って下さい 過ちは 繰返しませぬから」で、誰の「過ち」かをめぐる31年間の論争、平和教育の本、教科書などに詳しく目を通してのことだった。私の元へ送られてきた新聞の切り抜きの束には、項目別に、丹念に自分の意見が書いてあった。

もともと島村氏は自民党員だった。しかし、田中角栄の金権政治に絶望し、離党。大衆運動では改革できない、選挙制度がまともに機能しないなら、力の行使が必要だと、大日本愛国党に入った。愛国党を選んだのは、赤尾敏氏の存在と、老舗のネームバリューだった。

「昭和20年前までの政治テロは、純粹で、情緒性がありましたね。なるほどやむをえない、と思わせる。日本のテロの本質は“最後の銃弾”です。人の命を奪うわけですから、最後の一発は自分に向けなくては」

田中角栄を殺し、自分も平和公園の慰霊碑におおいかぶさり死んでいる夢を、2回見た。天皇は、神武から平成まで連綿と続く神、だと言う。もし天皇をいらないと言うのなら、天皇からさらにさかのぼる、天照大神を祭った伊勢神宮もいらない、と言わなくてはならない、と島村氏は言う。

以前は過激だった。何十台も街宣車を広島に集めたこともある。地元のヤクザ組織、共政会に刺され、ドスが背中に刺さったまま、開いている病院を探し回ったことがある。愛国党を広島で始めたときは、中古の郵便配送車を譲り受けたから、真っ赤な街宣車だった。

4、5年前から、方針を変更した。宿敵で、これまで一方的に糾弾してきた、広島県教職員組

合を訪ねた。行動の行き過ぎで迷惑をかけたと詫び、互いに相容れない深い溝はあるが、普通に話し合えるところまで近づきたいと申し入れた、と言う。

「これまで、平和運動の中心には、左翼運動がありましたが、尊皇主義の平和運動をやりたいのです。10年計画で。最初の5年は、われわれの考えていることが、マスコミの方々に分かるようになり、左翼の方々と対等に議論できるようになる。後の5年は、我々の思想を飛躍させ、平和運動でも社会運動でも優位に立つようになる」

師の赤尾敏氏ゆずりの、ドン・キホーテのような人だと思った。ターゲットは、その時の政治体制だと言う。国旗掲揚促進会代表でもある。

以前、学生が街宣車に乗って、議論したことを覚えているか、と聞いてみた。

「ああ、あった、あった。でも後にも先にも、勇敢な学生はあの時だけだったなあ」

その一人が私のパートナーであることは、何となく言いそこねてしまった。

沖繩一読谷村を照らす「光と影」

その日も、沖繩、那覇地裁の前は、殺気立っていた。87年10月、海邦国体、読谷(よみたん)村、「平和の森球場」で日の丸を焼き捨てた、知花昌一被告(42歳)の公判の日だ。すでに16回目の公判になる。私が来たのは、これで3度目だ。

何とまあ、マンガチックな裁判だった。整理券を配るのに、右翼側受付と、支援側受付がある。第一回公判で、両者が衝突して怪我人が出たこともある。右翼は正門に、支援側は、脇門に並ぶ。傍聴席は、27しかない。どういうわけか、右翼側に赤の整理券、支援側に緑の整理券。赤の○番、緑の○番と呼ばれ、順番ごとに竹ひごを引く。

写真を撮っていると、裁判所、公安、右翼、三つどもえでうるさい。「人権問題だ」という声が、右翼側から飛んでくる。

知花氏は、彼が日の丸を焼く前から知っている。私が彼と出会ったのは、3年前、子供たちにどう戦争を伝えるか、というテーマで、8月15日に放映する、テレビの特別番組を作ったときだ。その中で、戦後40年間タブーだった、村の集団自決の事実を掘り起こし、次の世代に伝えようとした彼は、大事な主人公の一人だった。

自然の鍾乳洞、チビチリガマで集団自決が起きたのは、1945年4月2日。米軍が沖繩に上陸をした、その翌日だった。避難した32家族、139人のうち、84人が集団自決をしている。

戦前の沖繩には、強い差別があった。そこから抜け出すため、沖繩の人々は人一倍、「いい日本人」になりたいと願った。その当時、「いい日本人」とは、天皇の赤子として、天皇陛下のために、お国のために死ぬことだった。だから米軍が上陸してきた時、生きて捕まるより死のうと、「天皇陛下万歳」を叫びながら、油に火をつけ、刃物で刺し違え、死んでいった。チビチリガマの集団自決は、戦前の皇民化教育の結果だ。

知花氏が“火の丸”をするに至るまで、戦前の沖繩から現在までの長い歴史がある。

その後、彼の経営するハンザ・スーパーは襲撃され、放火された。チビチリガマの前に、皆が願いを込めて作った「世代を結ぶ平和の像」は、無残に壊された。日の丸のついた鉢があった。

「国旗燃やす村ニ平和ハ早スギル 天誅下ス」

それにしても、なぜ沖繩に右翼がいるんだろう。その右翼団体の長は、知花氏と同じ読谷村出身と聞く。どうしてもその人に会って、ぜひ話を聞きたい、と思った。

大日本維新党総裁の松田昌雄氏(44歳)と会おうと、「桜魂」という機関誌を出している所

におそろおそろ電話をした。

シンボルは赤旗と日の丸

読谷村は、全面積の47%が基地だ。グリーンベレーも常駐するトリイ通信基地の前のレストラン。公判で見ると、おそろしい顔の松田氏と違って、一対一の時は、沖縄の人らしい素朴さがあった。

最後に言われてしまった。

「熊谷さん、裁判は初めてじゃないでしょう。この前も来てたでしょ。顔見てすぐ分かりましたよ」

支援側でウロウロしていたのを、知っていたわけだ。

松田氏と知花氏とは、わずか2歳しか違わない。同じ村で、小さいころから顔見知りのはずだ。松田氏の両親は、終戦と同時に、サイパンから引き揚げてきた。

「兄と姉は戦争で亡くなっているんです。遺骨はまだ、向こうですよ。おふくろも、うちの姉におっぱいを飲ませながら艦砲射撃でやられておりますから、弾がおふくろのものの中に、亡くなるまで入りっぱなしでした。戦争というものは、二度と再びやったらいかん、という気持ち強いですよ」

6人兄弟の一番上で育った。読谷村の字座というところだ。反戦平和を訴え、革新村制を引っ張ってきた山内徳信村長と、同じ出身だ。

父親が病気になる、家は貧乏だった。その頃、沖縄の子供たちが誰でもするように、米軍演習場で、パーンと音がし、閃光が走る中、薬きょうを拾い、わずかなカネを得ていた。弟と二人で、朝早くから働き、まじめな少年だと、新聞で紹介され、表彰もされた。父親がなくなり、中学3年の2学期、家族会議が開かれた。当然行けると思った上の学校を断念するように言われた。ただで本が読めると思い。親戚の本屋で配達を手伝い始めた。

「中学卒業の年の4月に、帽子に二本線入れて参考書を買いに来たり、なかなか乗れないバスに乗って高校へ行く同級生の姿なんかを見たら、もう耐えられなかったです」

1年くらい辛抱したが、隣の嘉手納で、夜けんかをしたり、新しい仲間と遊びだす。その時に、沖縄のやくざ組織、旭琉会とつながりができた。心配した親戚と村の先輩たちが、何度も呼び戻しに来た。

当時沖縄は、復帰運動の真っ最中で、赤旗とともに、日本のシンボルとして、日の丸も盛んに振られていた。

倒産後の急展開

彼も、米軍基地で働くようになり、基地労働者の組織、全軍労にはいり、果敢に闘争を始めた。執行委員もやっている。字座の青年の会の会長もやった。

そのとき作ったのが、「限りなき戦慄」という、反米反戦の演劇だ。嘉手納基地を飛び立ったB52が、滑走路手前の山に突っ込み、人が殺された事件をモデルにしていた。東京の演劇コンクールに出そうとしたが、米軍との関係を気にして、周囲は反対した。そのとき、出すように頑張ってくれたのが、当時読谷高校の社会科の教師だった、山内村長だった。彼は主役をやり、その芝居は、特別賞をもらった。

知花氏は、読谷高校に入り、一度就職はしたが、沖縄大学に進んだ。自治会の会長に選ばれた。

大学での活動をしながら、全軍労の支援にも駆けつける日々だった。が、その頃の全軍労は戦闘的で、学生とは較べものにならなかった、と知花氏は言う。

二人は、同じ闘争の渦の中において、同じ熱い思いで、祖国復帰運動を闘っていた。

松田氏は、10年間いた基地をやめた後、沖縄で初めてのディスカウント・ショップを始め、成功した。しかし、決定的に彼の運命を変えたのは、75年の海洋博だ。県民が持っているものをすべて出し合って、100年に1度あるかないかのこの大事業を成功させよう、というのが、当時のキャッチフレーズだった。クーラーを安く500台、現金で仕入れた。仲宗根美樹の夫であった白橋栄治氏がやっていた、ビックマートに納入した。支払いは手形だった。さらにテナントも二つ買った。しかし、ふたをあけてみたら、一日に、焼きそばひとつ、コーラ1本売れないような場所だった。白橋商会は倒産。彼は何も取れず、1億円の借金を抱えた。

「皆、引き潮のごとく去っていて自分一人しか残らんしね。いい時は持ち上げて、集まってきましたよ。しかし、一転パーンと落ち込んだときは、みんなそばを向きますよ。つくづく人間の嫌さをね、あのとき感じましたよ。カネでも無心されたらと、俺が通ったら、先方がよけていくぐらいです」

どん底のとき、助けてくれたのが、昔つき合いのあった旭琉会の仲間であった。

「だから人間はレッテルじゃないって、いつも言うんです。もちろん、旭琉会や右翼っていうと、毛虫より汚い思いで、世の中の人たちは、さげすんでおりますけれども。しかし、すべてがそうじゃないんです」

彼が、ある種の民族派、右翼の芽生えを感じ始めたのは、倒産後だった。いくら地域で沖縄県人が一生懸命、汗を流してがんばっても、日本の国自体に力がなければ、すべて水の泡と化していくのだな、と考えた。

旭琉会が右翼団体を作るとき、それに参加した。いまは任侠右翼を誇りにしている。天皇は“絶対”だとこの5、6年、思い始めた。

知花昌一氏の話になると、沖縄県民に泥を塗られた、との思いから、「いいですか」と念を押すようにこちらをきくと見据え、荒い口調になる。

同じ所に生まれ、同じ時代を生きてきたこの二人は、まるで、光と影のようだ。松田氏は、事業に失敗、任侠から右翼の道へ。知花氏のほうは、スーパーマーケットやスナックを経営、読谷商工会の副会長をやっていた。そして日の丸を焼き、ある意味ではヒーローとなっていく。

ときどき、支援の仲間と話すことがある。松田氏は、事業さえ失敗しなかったら、保守系のいい政治家になっていたんじゃないかと。

東京Iー左翼コンプレックス

「新右翼」と呼ばれる、一水会の街宣車に乗った。白く、古く、小さい。はってあるピラも、どことなく左翼っぽい。だから、ときどき左翼と間違えられ、黒塗り街宣車から、「非国民」と怒鳴られたりする。20代の若者たちが、「反米愛国、抗ソ救国、民族独立、尊王廃憲、山河死守」などとスピーカーで流しながら、右翼につきものの音楽はなしで、町を走る。しかし交差点で止まったとき、外の人々が、中の私たちを見る視線は、こいつら何だと冷たい。

代表の鈴木邦男氏(47歳)のところには、最近、右翼から、脅迫状やら脅迫電話が舞い込む。「殺してやる」とか「若い者とばす」だとか。テロを否定し、マスコミに頻繁に登場し、左翼を理解しようとする。従来の右翼のイメージとほど遠い鈴木氏に、右翼内部では、反発もあるだ

ろう。見た目のソフトさも異質だ。優しい眼差しで、右翼の鈴木さん、と紹介すると、エッと息を飲む人が多い。

「レコンキスタ」(スペイン語で失地回復の意味)という、月刊機関誌を出し続けて16年目になった。高田馬場、商店街のビルにある事務所で、若いメンバーたちを穏やかだが、力強い口調でアジった。

『レコンキスタ』が右翼新聞で一番いい、なんて思っちゃだめだよ。一人一人が一水会を背負うつもりで、朝日や読売や毎日と競争するんだ」

購読数3000だが、その半分を左翼が読んでいる、という。鈴木氏が最初に出した本も、東アジア反日武装戦線を描いた、『腹腹時計と〈狼〉』だった。彼らの持っていたストイックさや真面目さにひかれ、右翼運動をやる自分へ問いかけたものだった。このときも、右翼の側からの脅迫はすさまじかった。

早大政経学部から、比較憲法学を専攻するため大学院に進んだ。大学の先生になりたかった。今でも、大学で研究生活をするほうが自分にはあっているんじゃないか、と思うことがある。自分にノルマを課し、月に30冊以上の本を読む。

反天皇論者と話したい

なぜ彼が右翼なのだろう。

母親が、生長の家の熱心な信者だったことに理由があるかもしれない。

「小学生の頃から、天皇陛下ってすばらしいなって聞いてきた。でも漠然としていて、何かやるという意識は、まるでなかったんですね」

生長の家の学生寮にいた彼は、第一次早大闘争で、ストライキをした左派の学生たちに対し、右派、民族派の学生たちを組織した。学生運動を続けるため、大学院も途中で止め、他の学部へ入り直した。最後の一年は、殴り合いばかりしていた、と言う。

中退後、故郷の仙台へ帰ったが、知人の紹介で、産経新聞の販売局に入った。

「このままエリート・コースを突っ走って、ゆくゆくは課長、部長になって、家もちゃんと持って、かわいい奥さんも持ってね。ちょっと不倫もしてね(笑)。そんな夢の設計をしていたんですね」

その秋、三島事件が起きた。「三島とともに割腹自殺をした森田必勝」は、大学と一緒に運動をした二年後輩だった。

「三島由紀夫は、やりたいことをやってそれで死んだ。でも森田は、非常に若かった。俺たちがサラリーマン生活やって、マイホーム的なことを思っているときに、あいつは命かけて死んでね。後ろめたいなと思った人間は、たくさんいたんですよ」

やり切れなくなった仲間が、月に1回、第1水曜日に集まるようになった。「一水会」の始まりだ。運動を再開。捕まって、産経新聞をクビになった。

「大衆運動は、全共闘の人たちとの戦いの中で学んだことが、多かったですね。地道に人をオルグしたり、集会やったり、演説もうまいのがいて、一人で、1000人とか2000人とかデモに連れて行く。そういう左翼コンプレックスというのは、今でもあるかもしれないですね」

一鈴木さんにとって天皇って何ですか？

ウツとつまって、困ったような顔をした。

「明解なものは、ないんですよ。・・・あらゆるものを許す存在なんじゃないですか。ただ僕は、

天皇のいらっしゃる日本はすばらしい、と思いますよ」

朴訥に続く。

「右翼の人は、神国日本とかいうけど、それはスローガンですよ。天皇陛下万歳、天皇陛下を守る、そのためには恐喝しても、一般の人を泣かせてもいいと、商売、営業でやってる人がいますね。天皇陛下を信じる、というのは、天皇陛下の理念を信じることでしょ。自分を捨てて世界平和のために祈る、世の人のために尽くしたい。天皇陛下万歳と言って悪いことをしている人は、その理念に一番遠いんじゃないかと。逆に、天皇陛下は日本の差別の原点だと言って人の中にも、貧乏に耐えながらボランティア運動をしたり、世のため人のため、献身的にやってる人たちは、いっぱいいますよ。むしろ僕は、そういう反天皇論者と友だちになりたいですね」

一水会を始めた頃に借りた、木造アパートに、ずっと独身で住んでいる。

「企業からカネはもらわない」

そして、一水会の若者たちの行動組織が、統一戦線義勇軍だ。現役の大学生を含め、50人くらいいる。9年前、前議長の木村三浩氏（34歳）を中心にできた。

東京生まれ。12歳年上の姉が、社会党青年部の熱心な活動家だった。子供のころから、「インターナショナル」とか「民族独立行動隊の歌」とか、しょっちゅう聞いていた。デモやメーデーにも、何回も行った。委員長だった故成田知巳氏に、おぶわれたこともある。家で姉がよく勉強会をやっていた。社会に対する見方は、この姉の影響が強い。

「自分自身では右翼だけど、左翼との距離ってというのは、社会矛盾だとか、社会正義だとかかざしているときには、そんなに変わらないんですよ」

統一戦線義勇軍が登場したとき、まず、ヘルメットにマスクでジグザグデモ、という“ほとんど新左翼”の姿に、人々は度肝を抜かれた。行動も過激だった。フォークランド紛争の際、アルゼンチンを侵略するイギリスは、植民地主義、最大の帝国主義だと、イギリス大使館に、火炎ビンを投げこんだ。

最近、ハイジャック犯の張振海氏を中国に返すな、の運動を繰り広げ、ハンガー・ストライキもした。

「何かやってもタガをはめておかないと、ズルズル転げそうな気がする。僕らのタガは、企業からカネを絶対にもらわないことです」

東京 II - 白い街宣車とネクタイ

昭和天皇が亡くなった日、二重橋前に土下座し泣いている、一枚の写真が、世界中を駆けめぐった。その主が、日本青年社の、中川成城事務局長（46歳）だ。

それまでも、天皇陛下の姿を見るだけで、ホロホロと涙が出てきた。自分の、昭和天皇への思いが、あまりにも強いのか、と思っていた。平成天皇が、新たに皇居から出てくる姿を、やはり二重橋前で見ていた。また同じようにハラハラと涙がこぼれた。これはもう、説明のつかないものだという。

日本青年社は、単独の右翼団体として、日本で一番大きい。現在、日本全国に支部50、会員3000人がいるという。69年に、前身の楠皇道隊から日本青年社となった。前会長の小林楠扶氏は、この1月11日に、亡くなった。住吉連合本部長、小林会の会長だった。中川氏も現在、住吉連合小林会中川組の組長だ。

日本青年社は、3年前、皇居にロケット弾を撃ち込んだ中核派の拠点、前進社ビルにガソリン入りポリタンクを積んだ街宣車で突っこんだ。また、ビートたけし糾弾をテレビ局の前でとり続ける、などの行動を起こしている。尖閣列島に灯台を建て、またムジャヒディン（アフガン反政府ゲリラ）の支援も行なっている。

六本木、飯倉交差点そばのビルにある事務所を訪ねた。北方領土が帰る、ということで、入り口に、大きな石のカエルの置物が、いくつも置いてある。

小林楠扶氏は、包容力と恐ろしさと、人間的魅力を兼ね備えた人だった、と中川氏はいう。

「ヤクザとしての小林楠扶、右翼としての小林楠扶に憧れて、入りました」

早稲田大学の、正門近くで育った。父親は、石職人だったが、博打打ちでもあった。長屋が、賭場になることもあり、雪の日に母親が、幼い彼を背負って外で見張っていたのを、まだ覚えている。父親は、家族で一般参賀をしないと正月が来ない、という人だった。いつも粹なきもの姿で、きれいな江戸弁をしゃべっていた。

彼も、熱が入ると、アタシはねえ、というきつぷのいい江戸っ子調子になる。

大衆に怖がられてはいけない

早稲田実業の中学の入学式の日だった。中高合同の入学式が大隈講堂であった。

「かあちゃん、いってくるよ」

ちょうどそのとき、母親が、梅酒の梅をつけ替えていた。一つもらってかじりながら行った。いまでも酒は、一滴も飲めない。真っ赤な顔をして、グウグウ寝てしまった。高校の卒業式に酒飲んでくるのはいるけど、中学の入学式に酔っ払ってきたのは初めてだと、全校生徒の前で、21発ビンタを食らった。クソッと思いながら、数だけは数えていた。

もうそれから、不良の烙印だ。翌日学校へ行っても、友だちは怖がって口を聞いてくれない。ふてくされた。梅一個で、人生が変わってしまった。あとは硬派の、不良道まっしぐらだ。ただ、生徒にも教師にも妙に人望があり、高3のとき、それまでなかった生徒会を作った。イガグリ頭を長髪に、ズックのさげカバンを廃止させた。

義理の兄が生長の家の信者で、連れられて行ったのもこのころだ。

愚連隊もやっていたが、30歳のとき、自分で右翼団体を作った。その頃は、ベ平連とよくぶつかり、小田実氏と、互いに野次り合いをやっていた。

「全共闘の学生とも、バタバタけんかして、連絡して出てこいと、喫茶店でそいつと二人で待ち合わせて、1時間ぐらいやりあって。『こんど会った時は許さない』『こっちもだ』『おまえなんかコーヒー代払ってもらいたくない』とワリカンで出てった。そんなことしょっちゅうやってましたよ」

「右翼が、怖さをなくしたら、右翼じゃない。仮にも私たちは、行動右翼といっている以上、怖さがなくなったらおしまいだ。でも、権力が怖がるのか、一般大衆が怖がるのか、そこだと思えますよ。一般大衆が怖がる右翼ではいけない。今までの右翼が、軍歌、軍服のイメージが強いから、誤解を受ける。それは、われわれの責任ですよ」

中核派や革マル派の人々とも会っている。

「左翼と右翼は、もっと話しあったほうがいい。左翼の人で、右翼の俺たちの上いってるという人は、たくさんいるんですよ。ただ、天皇のことは除きますけど。本当に国を憂いているすばらしい人は多い。そういう人たちと激論しないでテロに走るのはどうかなと。しかし私自身

は基本的に、テロ肯定論者です。ただ、タイミングと標的を間違えると、大変なことになる」

「マスコミというのは、今までこれだけ影響力がありながら、天皇の戦争責任というのを、戦後40年間、タブー視してきたでしょ。マスコミの側から取り上げなきゃいけないことなんですよ。国民みんなで考えなきゃいけないことを、マスコミは、封じてきた。本島さんが言ったことに、ほら、このときとばかりに飛びついて。それが許せない」

確かに、本島市長の「天皇の戦争責任はありと私は思います」は、あのとき市長がたくさん答弁した中のごく一部だった。このことは、今回会った多くの右翼の人々が、指摘している。本来、私たちがきちんと言わなければいけないことを、本島市長を盾にして、大騒ぎをした。

中川氏は現在、人工透析を、1日おきに受ける身だ。

新橋駅前、日本青年社の街宣を聞いた。最初に君が代こそ流したものの、白い街宣車に、背広、ネクタイ、白手袋と、ソフトムードだった。

終章一規律に憧れる若者たち

今、右翼団体に入る若者たちは、何を考え、何を求めて入ってくるのだろうか。

一水会（統一戦線義勇軍）の日野興作さん（21歳）は、これから日本はどうなるのか、漠然とした不安があった。硬派で、日本的なものに憧れていた。故郷では、右翼というと暴力団だったので、覚悟が必要だった。それまでは、普通の会社でアルバイトをしていた。愛国党にも行ったが、日の丸と星条旗が並んでいることに抵抗があった。

森茂夫さん（23歳）。鈴木邦男氏の「新右翼」の本を読んで入った。それまで、右翼は嫌いだった。ただ、中学のとき、新聞の縮刷版で三島事件を見て、衝撃を受けた。昭和天皇の崩御で、右翼を意識し始めた。高校を経済的事情で中退し、ずっと働いてきた。入って2ヶ月だが、今が一番充実している。

徳弘洋介さん（25歳）。挫折と模索の中から、だという。俺がこのときこの世に生きてたな、という足跡を残したかった。何が世の中の潮流になりえるか考えたとき、新右翼ではないか、と思った。元自衛官人。人々の代弁者でありたい。

鈴木邦男氏の言う「学生サークル」の趣が、いまでもある。彼らは、生活できなければ、アルバイトをしている。

統一戦線義勇軍の若者たちのラフさとは正反対に、日本青年社の若者たちは、全員、スーツでびしっときめて現れた。

高木健司さん（22歳）は、中学を卒業し、家業の床屋を手伝う中で、地元でやっていた日本青年社の勉強会に出会った。そこで聞いた言葉にひかれ、普通と違っておもしろいなど、自分もやりたくなった。今は専従だ。

亀田晋司さん（23歳）は、まず、8月9日の反ソデーに、なぜ右翼が街宣するのかに興味を持った。ヤクザなら、そんなことはしないだろうと。社員が12人いる建設関係の会社の社長だ。

馬場弘康さん（21歳）は、小林前会長をしたって、長崎県から来た。将来、アジアの言葉の学校を開きたいと思っている。

長谷川正明さん（27歳）は、仙台でヤキイモやさんの元締めをしている。この日、婚約者との結納があると、嬉しそうに帰っていた。以前は、コンピューター関係の会社にいた。

日本人だから右翼をやっている。皆、活動を始めてから、天皇は神だと考えるようになった。入る前は知らなかった、日本青年社と住吉連合の関係を知り、大きな矛盾を感じた若者もいる。

両方に属している人がいるのは事実だが、自分は右翼の日本青年社をやっているのだから、ヤクザの住吉連合とは区別してもらいたい、と思っている若者もいる。

「ディスコより演歌だった」

私はある夜、横浜駅の近くで、ビラ貼りをするのを眺めていた。9時頃、横浜に本拠を置く、瑞穂塾（寺澤嗣生塾長）の3人だ。

糊の入ったバケツに刷毛、ビラを大量にポケットに突っ込み、ペタペタ素早く貼っていく。電信柱、ガードレール、信号機。ビラに書いてある電話番号を見て、ときどき、問い合わせがあるのだそう。初めは、アベックの嫌な視線が気になるものの、貼っているうちに、無我の境地になる。そう話していた途端、私の目の前で、本当に警察に捕まってしまった。伊藤満さん（29歳）と瀬野壽夫さん（29歳）は、いとこどうしだ。

現在二人で、浄化槽の管理会社をやっている。

「ディスコより演歌」だったと言う。まず、規律正しい、男らしい、清潔なイメージに憧れた。国土館大学で、「大和桜会」というサークルを作った。本格的に右翼をやろうとしたら、20人のうち4人しか残らなかった。始めてみると、麻薬のようなものがある、と言う。天下国家を語りたい。

二人とも結婚している。街宣車でマイクを握っているとき、たまたま自分の子供と会い、「あっ、お父さん」と大声で言われると、やはり照れ臭い。

相原修さん（20歳）は、高校時代、ロック・バンドをやっていた。自衛隊に入り、矛盾を感じ一年でやめる。政治とテロは表裏一体だと考えている。先日、社会党本部に、ドスと手錠を持って入り、事前に見つかった。社会党というより、国民を撃つつもりだった、と言う。色白の、まだ少年のような感じだ。

私自身、右翼とは話ができないものだと、ずっと思いこんでいた。そして、一人一人の人間ではなく、『右翼』という大括弧でくくっていた。ところが、のっぺらぼうであったその人々の表情が、見えてきた。

本当にメチャクチャな、単なる資金稼ぎの、日本から消えてもらいたい右翼もいる。しかし、私が出会った右翼の人々の中に、疎外感や悩み、強がりを感じることもあった。

実は、右翼も寂しいのではないかな、と思った。一対一で会うと、皆いい、優しい人なのに、集団になると、なぜあのようにおっかなくなるのだろう。それも彼らの“寂しさ”の裏返しなのではないかな、と。

そしてやはり、最初のというか、最後の天皇観のところで、よく分からなかった。これはきっと、彼らは天皇を神とする人たちだからだろう、と思うことにした。もちろん、私の会った人々がすべてではない。

私は、日本人を知るうえで、右翼を知るということは、とても大事なことだと思う。でも、12万人と言われている右翼の中で、まじめに、きちんと右翼をやっているのは、果たしてどれくらいいるのだろう。その意味では、彼らは、“寂しい日本の右翼”なのではないだろうか。